

読んでよし、ものとしても美しい

僕らが古書に魅かれるワケ

昨今、復刻でよみがえった本が
ミリオンセラーになったり、ドラマ化されたりしている。
過去の書物には、どんな魅力があるのか？ 企画のヒントは？
名うての編集者お二人に聞いてみた。

「文源庫」代表
石井紀男
随文家
坂崎重盛

新刊書が苦しい時代

坂崎 えーっと、今日のテーマは何
でしたっけ？

——「古書や絶版、品切れ本のなか
には、宝物があるんじゃないか」で
す。ただ、八十年前に出た『君たち
はどう生きるか』のような本がベス
トセラーになる一方で、年間八万冊

以上も出ている新刊市場はなかなか
厳しい。なかには、箱も開けずに本
屋さんから返品されてくる本がある
なんて話も聞きます。

石井 開封もせずに返品することを、
ジェット返品というんです。

坂崎 新刊の営業で担当者が地方を
回ったりするでしょ？ その営業が
帰ってくる前に、本のほうが先に返
ってきたりするっていうんだから。

吉本興業じゃ、芸人さんが（童謡「鯉
のぼり」のメロディーに乗せて）ギヤラ
より高い交通費くっ っ歌ってた
っていうけど、出張戻りより早い返
品なんてねえ。

——刊行点数があまりに多いがため
に本屋さんも対応できず、やむなく
そういうことが起きてしまうのかも
しれません。

坂崎 それもあるでしょうが……。

——そんな事情もあって、売り上げ
の悪い本は、あっと言う間に絶版
……いや、品切れになる。最近ほ、
あまり絶版という言葉は使わないみ
たいですね。

坂崎 いまでも普通に使う言葉です
よね？

石井 使います。品切れとはまた別
の意味だと思いますね。

坂崎 品切れの場合は、ちよつと様
子を見て増刷することもある。岩波
書店みたいに、実質上は絶版になっ
ているけど、絶版とは言わずに品切
れと言いつけている出版社もありま
すね。

石井 いまはずいぶん違うと思いま
すが、かつての岩波文庫は、古いも
のを復刻するとだんだん活字が小さ
くなっていったんです。岩波では、
印刷会社の精興社というところで大
量の紙型をストックしていたんです

が、紙型は保存している間にどんど
ん縮んでくるんですよ。ですから、
もとの級数は八ポイントくらいだっ
たのに、復刻したものはどう見ても
七・五ポイントにしが見えない。

坂崎 一方で、ある出版社の文庫な
んかは、組み直さないうで本のペー
ジを写真に撮って印刷しちゃったん
ですよ。

石井 写真製版してしまっってこと
ですよ。

坂崎 そうそう。だから、なんと
くへロへロした、薄っぺらな文字に
なっちゃうの。復刻とはまた別の話
だけど、昔は返品されてきたものを
再出荷することが、けっこうあった
んです。本をシユシユシユツと削っ
て、化粧直したりしてね。

石井 背以外の天地・小口を、普通
のカンナを逆さにしたような道具で
削るんですよ。B本（バーゲンブッ

ク っっていう、いわゆるゾッキ本に
なって出た本なんかを見ると、縦に
薄く筋が入っている。あれはカンナ
をかけた跡です。

坂崎 B本じゃない定価の本でも、
カンナをかけた本が出ている場合が
ありますよ。同じ新書で古いのと新
しいのを見ると、古いほうが削っ
てるぶん、ほんのちよつと高さが小
さくなったりするんですよ。

石井 かつては、返品がある程度た
まると、一定以上の売り上げがあつ
た本に関しては、書店の了解のもと
に「再委託」という仕組みがありま
した。「新刊委託でダメでも再委託
でなんとかなるか」という感じで、
本が世に出る期間が長いぶん、チャ
ンスがあつたんですよ。ただ、新
刊みたいに委託期間が六カ月もなく
て、せいぜい三カ月くらい。

坂崎 いま再委託は、ほとんど書店